

## 第2回 答えか問いか

たとえば学校での「感謝」の授業は、「親に感謝することは大事よ」と正しい答えを教えようとするのが一般的です。しかしある学校では、「今日から一週間、感謝される活動をしてください。そして来週、感謝って何か、みんなの意見を聞かせてください」と課題を出すといいます。子どもたちは、各々の経験を通じ、自分の頭でそれについて考え、答えを出そうとします。そこでは、大人が思いもしない経験が報告されたり、感心させられる考えが出たり、目から鱗の対話が飛び出したりで、先生にとってもワクワク楽しい授業になるそうです。

どんなに正しい答えでも、ひとは他者から言われるとなんとなく押し付けられた息苦しい気分になりがちです。頭で理解しても、身体にしみてくることは少なかつたりします。けれどもし、自分でたどり着いた答えなら・・・少なくともわたしは、ひとを育てゆくために必要で効果的なのは、「答え」ではなく「問い」だと思っています。

前回のお話は、このことともかかわっています。「お皿を割っちゃダメ」「遅刻をしちゃダメ」。大人がそう伝えるとき、どこか、あらかじめ自分が決めたひとつの答えに相手（子ども）を閉じ込めようとする力みを持ちがちです。それが、相手の意欲ややる気を削いでしまい得るわけです。けれど子どもへの信頼とともに「お皿を大事に持っていて」「時間を守ろう」と語る時、そこには、「さあ、そのためにあなたはどうする？」と、ちょっとウキウキした問いがはらまれている気がします。その期待に応じて「座って持とう」「タオルにくるんだらどうだろう」「三人交代にしようか」・・・と、子どもたちにたくさん答えが生まれるのです。

大事なのは、主体的で意欲的なやる気は、放っておく時ではなく、問いかけ耳を傾けようとする誰かがいるときにこそ生まれるという点です。放任や教育の放棄とは違う「問い」。それは子どもたちの自由や主体性を育むひとつのやり方かもしれません。